

(鹿児島市武町1丁目)

位置と環境

武遺跡は鹿児島市の中央に位置し、遺跡の北西700mには標高約120mのシラス台地である「武岡」がある。武遺跡は甲突川右岸の自然堤防で標高7～9mの微高地に立地する。この微高地の東南には、標高が3mで東西1km、南北2kmの範囲に及ぶ鹿児島大学の広い敷地も沖積地として形成されている。

武遺跡は発掘調査地点毎にA・B・C・Dと分かれており、D地点は「寿国寺跡」として報告書が刊行された。

調査の経緯

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い、県教育委員会が平成4年度に詳細分布調査を実施し遺跡の存在が確認された。本調査は、西鹿児島駅（鹿児島中央駅）整備事業により、平成5年度に3次に分けて実施した。

第1次調査 武A遺跡 1,100㎡

第2次調査 武B遺跡 384㎡

第3次調査 武C遺跡 2,718㎡ 計4,202㎡

なお、調査対象区域内は、旧鹿児島県工業試験場や九州鉄道旅客株式会社鹿児島支店等の建物攪乱を受けていたため、調査範囲がかなり制限された。

整理作業は平成14年度に実施し、報告書も同年度に刊行した。

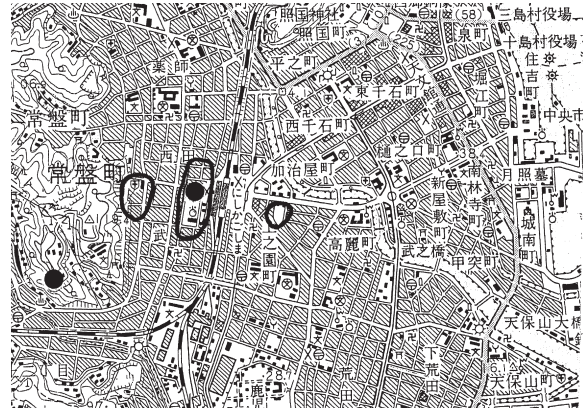
遺構と遺物

縄文時代は、早期の前平式土器が1点出土したが、流れ込みと思われる。

前期は、集石を1基検出した。遺物は、轟系式の土器が少量と深浦式土器が多量に出土した。中期では、船元式土器、春日式土器、北手牧式土器、大平式土器、並木式土器、南福寺式土器などが出土した。

晩期では、刻目突帯文土器が出土した。また、半分欠損した大珠が1点出土している。

弥生時代は、中期末から後期初頭にかけての山ノ口式土器、後期の三津永田式土器、頸部の欠損した免田式土器の長頸壺が出土している。



第1図 武遺跡の位置

古墳時代の遺構は竪穴住居跡23基、大型土坑11基、土坑37基、溝3条などを検出した。竪穴住居跡は、その形態で次の6タイプに分類できる。

大型で花卉状張出タイプ	2軒
大型で円形タイプ	2軒
中型で方形に方形張出タイプ	14軒
中型で方形に円形張出タイプ	2軒
中型で円形に方形張出タイプ	2軒
小型で円形タイプ	1軒

大型土坑は規模が2～3mで、半円形、円形、方形タイプに分類できる。土坑には、長楕円、円形、隅丸方形の3タイプに分類できる。

成川式土器が大量に出土したが、器種としては甕、鉢、壺、高坏、特殊壺、蓋などがある。

平安時代の遺構は、断面の形状が逆台形の溝、1条を検出した。遺物は、9世紀中頃から10世紀中頃の土師器、須恵器が出土した。

そのほかに、近世の水田の溝と明治以降と思われる井戸が検出された。

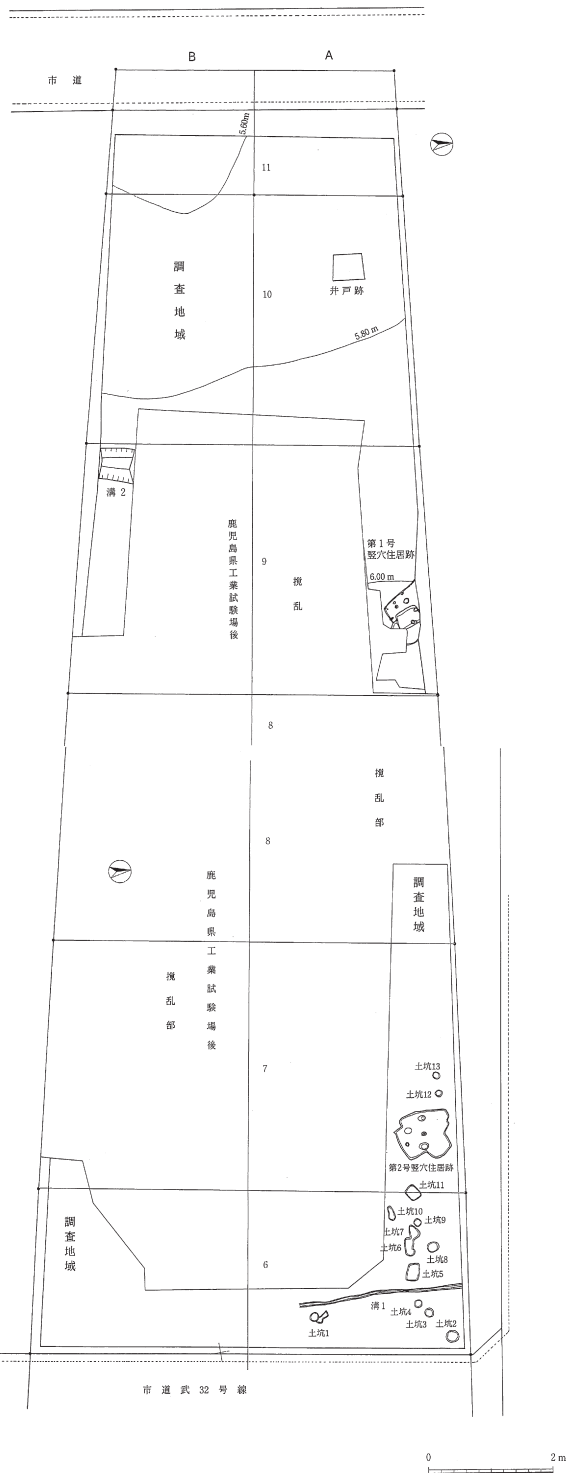
特徴

本遺跡は、甲突川の自然堤防上に縄文時代から形成された遺跡であるが、その主体は古墳時代である。遺跡から出土した成川式土器は、東原タイプの時期に比定される。また、検出した遺構から大きく2時期の集落がとらえられる。

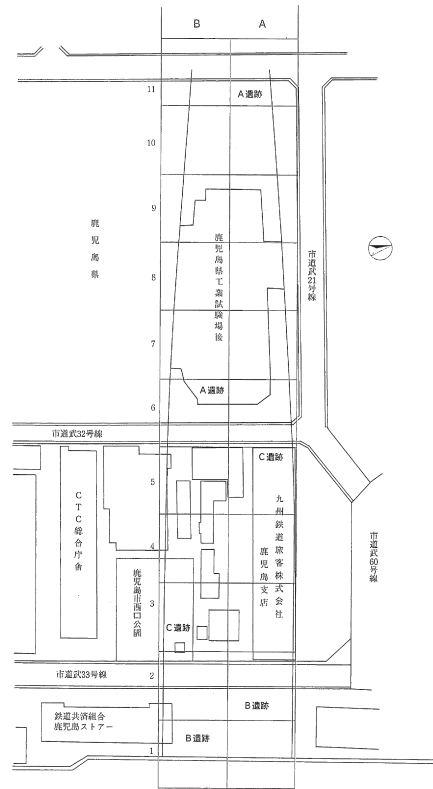
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

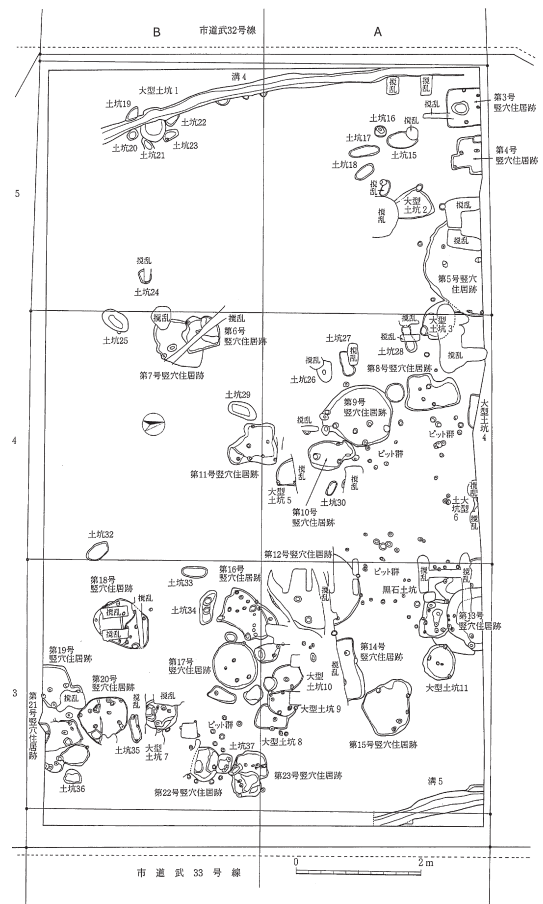
参考文献



第2図 武A遺跡の遺構配置



第3図 武A・B・Cの調査範囲



第4図 武C遺跡の遺構配置